

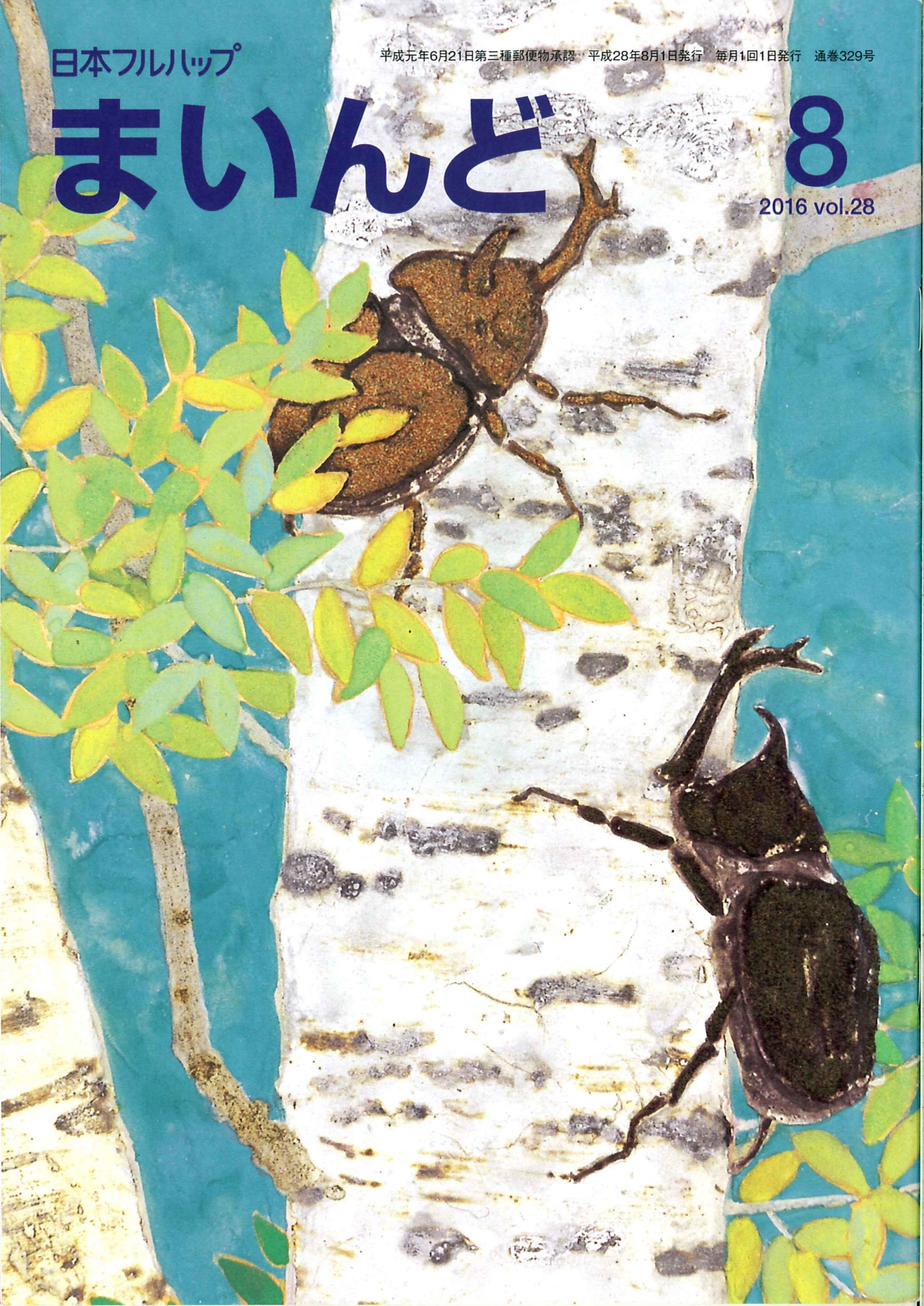
日本フルハップ

平成元年6月21日第三種郵便物承認 平成28年8月1日発行 毎月1回1日発行 通巻329号

まいんど

8

2016 vol.28





▲ 国分寺会館



▲ 国分寺会館メモリアルホール内。最大300人まで収容可能。



▲ 祭壇例。花の種類や配置など、遺族の意向を尊重して自在にデザインする。



▲ 無料送迎バス3台と、家族4人が同乗できる香川県初の大型霊柩車「みちびき」。300台が駐車できる大型駐車場も完備している。



▲ 「国分寺会館」のキッズルームとバスルーム。



伊藤雄介さん

あやがわ

株式会社綾川葬祭

常務取締役兼国分寺会館責任者

所在地：香川県綾歌郡綾川町北1250-6

TEL：087-876-4775

FAX：087-876-4781

http://ayagawa-sousai.co.jp

(高松信用金庫 国分寺支店)



オーナー
登場

十人十色の葬儀を真心こめてお手伝い

(株)綾川葬祭は3つの葬儀会館を持ち、小規模な家族葬・直葬から最大300人の大規模葬儀まで、遺族の意向を反映した葬儀・法要と充実したサービスで高い評価を得ている。地域から信頼される事業の理念を、常務取締役兼国分寺会館責任者の伊藤さんにお伺いした。

独自のサービスで地域に根ざす

伊藤さんの父で代表取締役の靖雄さんは、香川県綾川町にあった葬儀社に20年勤めたのち、平成20年、1日1組限定で葬儀を行う「法道寺会館」を建て、(株)綾川葬祭を創業した。

その後、退職した葬儀社が廃業したため、そこから「セレモニーホール綾川」を譲り受け、エレベーターやバスルーム、事前相談コーナーを設けるなど、誰もが快適に利用できるようにリニューアルを行った。

さらに、家族や近親者だけで行う家族葬の需要が増え始めていたことから、同23年にはセレモニーホール綾川の新社として「法要会館」を設けて小規模葬儀のニーズにも応えてきた。

「小さな子ども連れの家族から高齢者まで、あらゆる年齢層のお客さまが利用されることを配慮した設備を整えました。1級葬祭ディレクター(厚生労働省認定・葬祭ディレクター技能

審査)や専属のフラワーデザイナーがご遺族に寄り添い、それぞれのご希望を尊重した葬儀・法要体制を整えています」と、伊藤さんは話す。だが、平成22年には近隣に競合店が出現し、一時的に大きく売り上げが減少したことも。

「父はかなり悩んだようですが、法要の営業のほか、入会金などの会員制度や、マイクロバスによる無料送迎(通夜・告別式・法要)、ドリンクや粗品の進呈など、当社だからこそできるサービスを徹底させ、業績を回復しました」

葬儀を営む日は突然やってくるが、その日に備えて準備をしている人は多くはない。(株)綾川葬祭では葬儀費用をすべて明瞭に表示し、会館の見学会も随時行うことで、トラブルのないスムーズな葬儀の運営に努めている。

「24時間365日、大切な人を弔う気持ちに誠実に応えたい」——同社の姿勢やサービスが口コミで広まり、地域ナンバーワンの葬儀社としての地位を確かなものとしている。

結婚後、葬儀のすばらしさに開眼し転職

一人息子の伊藤さんは小学生からレスリングを始め、夢中になっていく。

「対等の相手と一対一で戦い、引き分けなしで勝ち負けがはっきりつくところに魅力を感じていました。全国高校総体は第3位、国体には

た」とまで言っていました。九死に一生を得て、3カ月後に無事退院できました」

この経験が伊藤さんの責任感を強めた。

「入社当初は、どこかに『公務員感覚』が残っていました。自分が責任を持って運営に臨まなければいけないと覚悟が決まりました」

その後、父・靖雄さんは「以前よりも元氣なくらい」にまで回復。平成26年には隣の国分寺町に「国分寺会館」を建設し、伊藤さんはその責任者となった。今後も近隣の葬儀会館建設は視野に入れているという。

「高齢化が進む一方で、人と人とのつながりや、死に対する認識が希薄になっているように感じます。最近では通夜や告別式などを行わない「直葬」も増えています。しかし、そんな時代だからこそ、地元の方々のコミュニケーションを大切に、多様なスタイルに対応できる葬儀社であり続けたいと考えています」

現在、伊藤さんは、綾川町商工会青年部部長、香川県警少年警察補導員・警友会などの活動を通して地元との交流を深める一方、自分が培ってきた技能を伝えたい思いから、綾川レスリングクラブで30名の子どもの指導。プロレスイベントなどで声がかかれば、覆面レスラー「キャプテンアヤガワ」として活躍する。

32歳の若さあふれる行動力で「地元とともに歩む」という信念を貫く伊藤さん。その胸には父・靖雄さんが従業員に説き続けている「常に謙虚な人間であれ」という教訓が刻みこまれている。

経歴を活かし地元とともに歩む

しかし、親子が結束し、新たなスタートを切ったその翌年、思いがけないことが起きる。

「父が交通事故を起こして入院したのです。警察官時代に、事故現場はいやというほど見てきましたから、ひと目で父の状態がかなり危険だとわかりました。父自身も私に『あとは任せ